

平成 26 年度「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」
共同利用・共同研究個人型共同利用 成果報告書
「戦間期中欧論の比較研究」

福田 宏（愛知教育大学・平成 27 年 4 月より）

hifukuda@aecc.aichi-edu.ac.jp

研究概要

申請者は、ここ数年、チェコスロヴァキアを中心とする戦間期中欧論について研究を行ってきた。中欧論をはじめとする所謂広域論については、旧東欧諸国のヨーロッパ「回帰」や EU 拡大が進展するなかで注目を浴びるようになり、「忘却されていた」様々な論者に光が当てられるようになった。だが、こうした歴史の探究は、旧東側のヨーロッパ・アイデンティティを再確認するものとして行われるケースが多く、批判的な分析はまだ不十分である。そのため申請者は、第二次大戦後の統合論との連続性を意識しつつも、戦間期のコンテクストに即して当時の広域論を位置づけることを試みている。

この度、個人型共同利用の機会を頂いたことにより、平成 26 年 8 月、同 27 年 2 月にわたり、スラブ研究センター図書室および図書館本館の資料を活用し、また、スラ研スタッフおよびスラ研を訪れていた研究者と様々な情報交換を行うことができた。

具体的に活用したのは、スロヴァキアのホジャに関する資料、および、チェコ出身の貴族 K. A. ロアンに関する資料である。いずれも、国内では北大しか所蔵していないものが多く、今回の共同利用のおかげで閲覧することができた。関係者の皆さんに感謝申し上げたい。

成果

学術雑誌『地域研究』において、「ロシアとヨーロッパのはざま」と題する総特集を組み、板橋拓己、宮崎悠、辻河典子、石野裕子の各氏の協力を得つつ、上記の申請者自身の研究を含めた小特集「両大戦間期の中央ヨーロッパ」を成立させた。それと同時に、現在における中欧について検討するため、服部倫卓、大串敦、溝口修平、重松尚の各氏の協力を得た小特集「ウクライナをみる視角」を組んだ他、双方の小特集を架橋するものとして、岩下明裕、遠藤乾、川島真、林忠行の各氏の協力を得て座談会を行った。

以上の総特集は平成 26 年度末に発行する予定であったが、事情により平成 27 年度前半の発行となった。年度内に成果を出せなかったことは大きな反省点である。

今後の展望

平成 27 年度においては、政治学会にて戦間期の広域論について成果発表を行う他、夏の ICCEES においても本研究に関連して活動を行う予定である。今後も、科研費等の支援を有効に活用しつつ、積極的に研究および成果発表を行っていききたい。